



## 英語教育における「超直訳」の可能性

著者	江藤 裕之
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	25
ページ	77-84
発行年	2017-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00122906">http://hdl.handle.net/10097/00122906</a>

# 英語教育における「超直訳」の可能性

江 藤 裕 之

英語によるコミュニケーション能力の向上を目指した4技能の育成に重点がシフトしてきた今日の日本の英語教育の現場において、文法訳読法は時代遅れという評価以上に、役に立たないもの、有害なものとしてとらえられている印象すらある。しかし、母語である日本語の基礎が出来上がり、日常的に英語を用いない環境で「外国語としての英語」を学ぶ日本人学習者に英語を教授する場合、日本語を介さずに英語を教えるよりも、発音、語彙、文法、文章の構成などにおいて日本語との違いを教え、意識させることは、英語の理解と運用能力にプラスの効果が期待でき、さらには母語である日本語に関心をもつきっかけになることもある。その意味で、伝統的な訳読法は外国語と母語との知的格闘を経験させ、外国語の内部形式を理解させるには効果的な手段であると言える（cf., e.g., 澤井, 2001; 杉山, 2013）。訳読にもいくつかの方法があるが、本稿では、文法事項の内容まで明示する「超直訳（super-literal translation）」という手法を提案し、その具体例を示しつつ、英語の構造や文法の理解を助ける訳読法の可能性を考えてみたい。

## 訳読における同化と異化

訳読と言えば、「直訳」と「意識」という2つの対照的な方法がすぐに思い浮かぶ。できるだけ原文の字句に忠実に訳していくか、あるいは自然さ（読みやすさ）を重視した訳文にするのかという問題は、翻訳論において古くからある主要なテーマである。西洋世界においては、聖書の翻訳で有名なヒエロニムス（Hieronymus, 340?-420）から、ドライデン（John Dryden, 1631-1700）、シュライアーマハー（Friedrich Schleiermacher, 1768-1834）、ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）にいたるまで、十数世紀以上の長きにわたって、直訳と意識のそれぞれの長所と短所が指摘され、翻訳はどうあるべきかが議論されてきた（cf. Munday, 2001, pp.146-148; 三ッ木, 2008, pp.241-251）。

こういった直訳（逐語訳）と意識についてのさまざまな議論は、ヴェヌーティ（Lawrence Venuti, b. 1953）が提唱した「同化（domestication, domesticizing translation）」と「異化（foreignization, foreignizing translation）」の対立に集約できよう（Venuti, 1995, 1998）。ヴェヌーティによれば、この両者の対立は、原文をいかに訳文の言語と文化に同化させて読みやすいこなれた訳にしていくか、あるいは多少は読みにくくとも原文に即した訳にしていくかということだが（cf. also Munday, 2001, p.147）、これは翻訳における究極かつ永遠の問題と言えるかもしれない。

原文に残されている言語的・文化的特徴を失っても読みやすい訳にするか、多少はわかりにくくとも原文にできるだけ近い訳をするか、その選択は翻訳者の判断に任せられる。もちろん、読みやすい訳に越したことはないが、原文に忠実に訳すことにも理由はあるだろう。これまで日本の学校教育で行われてきた英文訳読の授業では、どちらかといえば、学習者に英語の文の構造を理解させる目的で、多少不自然な日本語になっても、直訳が採用されてきた。しかし、あまりに

も不自然な直訳は避けられてきたように思う。

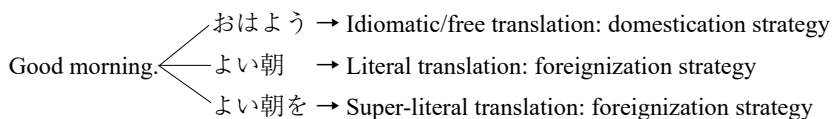
たとえば、My son is a student at Oxford. というシンプルな文は、教室では「私の息子はオクスフォード大学の学生です」と直訳され、この訳文は日本語として違和感はない。ただし、どちらかと言えば「動詞的」に訳した方が日本語としてしっくりするので (cf. 安西, 1982)、コンテキスト次第では「オクスフォードで勉強しています」の方がより自然に聞こえる場合もあるだろう。もちろん、中学校や高校の英語の授業ではそこまで要求されず、直訳でよいのである。しかし、直訳と言っても、上の訳では不定冠詞 a は訳出されていない。「ひとりの学生」のように無理に a を訳してしまうと、日本語として不自然に聞こえるからである。

原文に忠実な直訳といっても、自然な日本語としての許容度を超えてしまつては、訳としては不適切なものとなる。しかし、教室の中では、「ひとりの学生」だとか「学生の中のひとり」のように、あえて不定冠詞 a を訳す異化的方略 (foreignization strategy) を取ることで、日本語では形式的に表現されない名詞の数や不定冠詞の「不定」の意味を学習者に意識させる英語の授業を展開させることが可能となる。

もうひとつ例をあげよう。朝の挨拶である Good morning. は、直訳を基本方針とする訳読方式の授業でも「おはよう」と訳して「よい朝」とはしない。それは、日本語の会話では「よい朝」という表現は絶対に使われないからだ。この場合は、原文の語を忠実に置き換えるのではなく、その挨拶に相当する日本語の自然な表現を当てる、つまり、意識していることになる。

「よい朝」は Good morning. の文字通りの訳 (literal translation) であるが、厳密に言えば、原文のもつ文法的な特徴までは訳し切っていない。Good morning. は I wish you a good morning. あるいは I wish a good morning to you. の一部であり、Good morning. をその文法的意味まで訳出するとすれば、「よい朝を」という対格を示す表現にしなければならない。これは、Good morning. に相当するドイツ語表現の Guten Morgen. (これは Ich wünsche Ihnen einen guten Morgen. の一部) の限定用法の形容詞 guten に対格を示す語尾 (-en) が付いていることから理解できよう。

Good morning. を「おはよう」と訳せば慣用的な意識 (idiomatic/free translation) となる。ヴェヌーティの分類に従えば domesticizing translation であり、日本語として自然な表現ではあるが、英語の Good morning. が内包する言語的・文法的特徴は失われてしまう (Gile, 2009, p.252)。一方、この英語表現を「よい朝」と文字通りの訳 (literal translation) にすれば、不自然に聞こえるものの、ある程度は原文本来の意味を保持する foreignizing translation となる (Gile, 2009, p.252)。さらに、「よい朝を」と訳せば、文字通りの訳を超えた、文法的特徴までも明示する訳となるが、こういった方略を Super-literal translation (超直訳) と呼ぶことにする。まとめると次のようになる。



Good morning. を「よい朝」や「よい朝を」と訳すのは、実際の教育現場ではありえないし、そうする必要もない。しかし、文法項目によっては、訳文が日本語として受け入れられなくとも、foreignizing translation という方略、それも、「直訳 (literal translation)」を超えた「超直訳 (super-literal translation)」という手法を用いることで、原文の文法的な意味やニュアンスまで学習者に理解させることができるのではないだろうか。

### 「超直訳」とは何か

管見の限りでは、英語教育の場において「超直訳」という用語を使ったのは、筆者が最初であり、それを「文法構造に忠実な意味」（江藤，2006, p.41）や「単なる直訳を超えて、文法事項の内容までも明示するような訳し方」（江藤，2015, p.iii）と定義した。この「超直訳」なる語は、翻訳や英語教育の世界では、いまだに認知されていない用語であろう。

似た用語に「超訳」がある。これは原文の順番を変えたり省略することも含め、意識をさらに進めて、自然な読みやすい日本語を目指す翻訳手法のことで、シドニイ・シェルダンの小説の日本語翻訳本（超訳シリーズ）で知られるようになり、出版元の「アカデミー出版」の登録商標となっている（cf. <http://www.ea-go.com/html/page08.html>）。その後、古典的名著の新訳にも「超訳 ニーチェの言葉」のように「超訳」がタイトルの一部として用いられている例もある（cf., e.g., 白取，2010）。この場合も原文の構造にとらわれない自由な訳という意味で使われている。つまり、言うまでもないが、超訳と超直訳とはベクトルの方向が真逆であり、両者は関係ない。

超直訳というアイデアを外国語学習に応用した例は、英語圏では一例のみ、*Russian Made Easy!* というロシア語学習のウェブサイトに見つけることができた（*Russian Made Easy*, 2014, June 10）。「Start Thinking in Russian with SLT」で始まるこのウェブサイトの最初のページには、

Using Super Literal Translation is essential when learning Russian!

S.L.T. [Super Literal Translation] makes your learning more efficient, increases what you can do with your vocabulary, and gets you *thinking in Russian*.

のように Super Literal Translation（以下 SLT）に期待される効果が述べられている。

SLT の具体的な内容は、*Russian Made Easy!* のウェブサイト上に公開されているビデオプログラム *The Key to Communicating in Russian ... fast!* の中で簡単に説明されているが、重要なポイントはロシア語の基礎学習に SLT を用いることで、学習者はロシア語を話すときにロシア語で考えることができるようになり、その結果、ミスすることなく流暢にロシア語を話すことができるようになるという点である。その方法として、「SLT tries to get to the core meaning of Russian words even if the translation seems awkward in English」と述べている。

たとえば、英語の *My name is Mark.* はロシア語では *Minya zavoot Mark* (Меня зовут Mark). となるが、このロシア語の文字通りの意味は *Me they-call Mark.* である。しかし、多くの場合、ロシア語の授業では、*Minya zavoot ~* (Меня зовут ~). というフレーズを暗記させるだけで、その文字通りの意味を教えないため、学習者はこのフレーズの真の意味を理解できないままである。このような現実を、このビデオプログラムでは「This is lazy teaching, and it does **significant harm** to a student's future in the language.」と酷評している。そこで、学習者にとって重要な学習法は、「Always find out the literal meaning of all the words that you're learning in Russian.」であり、このポイントを注意していれば、能力、年齢、環境等に関係なく、誰でもロシア語をマスターできると主張している。

訳文が不自然で変に見えても、原文の「コアとなる」意味を理解しようとする点、そしてコアとなる意味を理解するために、原文の文字通りの意味を考えてみるという点は、筆者が示す「超直訳」の基本的な考えと一致する。上に挙げた *Good morning.* の例で言えば、「よい朝を」という超直訳は、「よい朝」という直訳では認識できない文法事項の「深層にある意味 (in-depth meaning)」を示し、

その表現が内包する文法的な「影の意味 (shadow meaning)」を明らかにする点で、「超 (super) 直訳」と呼ぶことができると考える。

以下、英語教育における超直訳の応用例を示してみよう。

### 超直訳の応用例 1：現在完了形

初級段階の日本人英語学習者にとって、現在完了形は理解しにくい文法項目のひとつであろう。その理由として、日本語に訳した場合、過去形との区別が難しい点が考えられる。たとえば、次の例文の場合、過去形と現在完了形の文とでは日本語訳は同じになる。

過去形            He lost the key. [彼は鍵をなくした]

現在完了形      He has lost the key. [彼は鍵をなくした]

もちろん、訳が同じだといっても、それぞれの文（特にその文の動詞の形）が内包する文法的意味は異なる。一般的に、現在完了形は「終わった行為や出来事が何らかの形で現在と関係していること (a finished action or event is connected with the present in some way)」(Swan, 2005, p.438) を言うときに用いられ、過去形は「過去に完全に終わってしまった行為 (actions completed in the past)」(Thomson & Martinet, 1996, p.162) を表現する形である。つまり、現在完了形を用いた He has lost the key. には「鍵をなくして、その状態が今も続いている」という含みがあるが、過去形を用いた He lost the key. は「鍵をなくしたという事実が過去にあった」という過去の事実を述べているに過ぎない。

現在完了形が示す現在とのかかわり、つまり、「鍵をなくした。だから、今はない」という意味を明示するために、「鍵をなくしてしまった (しまっている)」と訳せないこともないが、「鍵をなくした」でも前後関係から十分に現在完了形の文の含みをもたせることはできる。このように、現在完了形の文の文法的な意味や用法をその日本語訳からだけでは、過去形の文と区別するのは容易ではない。

そこで、現在完了形の核心的な文法的意味を理解するために、その「形」に注目して超直訳してみよう。現在完了形は「have + 過去分詞」という形で表される。現在完了形を作る助動詞 have は、元来は「もつ、もっている」という意味の「所有」を表す現在時制の動詞である。したがって、He has a pen. は次のように考えることができる。

He has a pen. → He has possession of a pen. / He owns a pen.

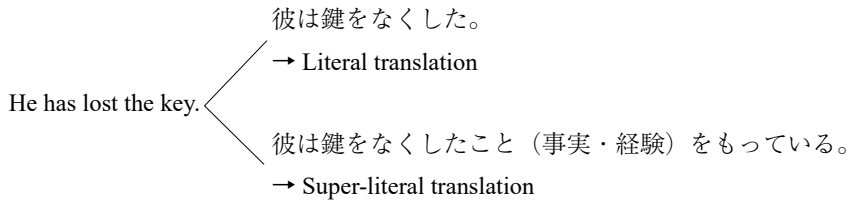
このパラフレーズと同じように、現在完了形の have も次のように解釈できる (cf., e.g., Pinker, 1994, p.246)。

He has lost the key. → He has possession of a fact that he lost the key.

He owns a fact that he lost the key.

つまり、He has lost the key. という現在完了形の文を「彼は鍵をなくした」と訳すのではなく、一語一語をより忠実に「鍵をなくしたこと (事実・経験) をもっている」と超直訳することで、

この文には「鍵をなくしたという過去の事実・経験を現在もっている」という隠れた文法的意味が含まれていることがわかる。そして、このことから英語の現在完了形は、過去の事実や経験を現在から回想すること (Yule, 1998, p.65)、つまり、現在との関連性から過去を見る表現形式であるということを学習者に理解させることができよう。



この「彼は鍵をなくしたこと（事実・経験）をもっている」という超直訳から、前後の関係、あるいは already, once, for two months などの副詞（句）のあるなしで、「鍵をなくしてしまった（完了・結果）」、「鍵をなくしたことがある（経験）」、「鍵をなくしたままだ（継続）」のように訳し分けることができ、学習者を悩ますことの多い現在完了形の用法の区別は、コアとなる超直訳から導き出せることがかわる。そして、「have + 過去分詞」で表される現在完了形の時制はあくまでも現在であり、現在完了形の文法的なエッセンスは、現在から過去を見る、すなわち、「現在 (have) + 過去に完了したこと（過去分詞）」であるという点も理解させることができよう (江藤, 2015, pp.15ff.)。

## 超直訳の応用例 2：現在進行形

次に、現在進行形を取り上げてみたい。現在進行形の文は、訳し方によっては、現在形の文と区別が付きにくいことがある。たとえば、現在形の文 He studies English every day. を「彼は毎日英語を勉強している」と訳すと、現在進行形の文 He is studying English now. の訳「彼は今英語を勉強している」と比べたときに、現在形 (speaks) と現在進行形 (is speaking) の違いが区別できない。もっとも、前者を「彼は毎日英語を勉強する」と訳すこともできるが、日本語訳だけを参考にしては両者の文法的な意味の違いを理解することは難しい。

現在形（単純現在）はふつう「永続的な状態、もしくは規則的、反復的、恒常的に起きること (permanent situations, or about things that happen regularly, repeatedly or all the time)」(Swan, 2005, p.450) を表現する場合に用いられ、現在進行形は「現時点、もしくは現時点を含む時間に継続している一時的な出来事や状況 (temporary actions and situations that are going on now or 'around now')」(Swan, 2005, p.451) について述べる場合に用いられる。その違いは、現在進行形の形である「be + 現在分詞」の be の意味にある (Yule, 1998, p.65)。

Whatever is, is right. (存在するものはすべて正しい) の最初の is は「存在する」という意味の完全自動詞で、次の is は連結詞である不完全自動詞である。このように、be 動詞には「存在」の意味を表す自動詞、補語をともなう連結詞（繫辞）、進行形を表す「be + 現在分詞」に用いられる助動詞の用法があるが (cf., e.g., Thomson & Martinet, 1996, p.153)、He is happy. の is のように連結詞として用いられることが多い。

しかし、連結詞の be にも、ある特定の状態、性質、役割 (the specified state, nature, or role) の意味が内包されているとの指摘もある (Soanes & Stevenson, 2006, p.116)。そこで、あえてその点

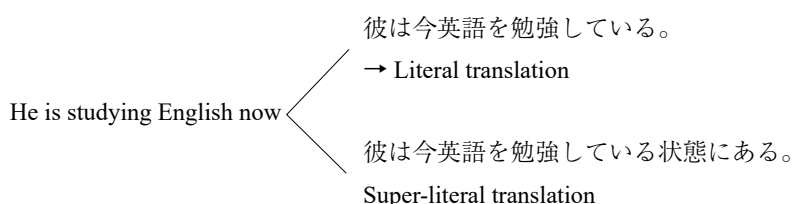
を表すと次ようになる。

He is happy. → He is in the state of happiness.

このパラフレーズを参考に、be 動詞を用いる現在進行形の文も次のように解釈することができよう。

He is studying English now. → He is in the state of studying English now.

このように考えてくると、現在進行形の文の直訳と、その文法的な意味を正確に表現する超直訳との違いは次のように表せる。



この超直訳から、現在進行形には、動作動詞を状態化すること、つまり「ある動作（行為）が続いている状態にある」ことを示す文法的機能があることがわかる。そこから、進行形とは、動作の一時性、つまり、ある一点の動作の状態（現在進行形であれば現在〔現時点〕の状態）が強調され、その結果、動作が未完結であるという点も学習者に理解させることが可能になる。

### 超直訳の応用例 3：現在完了進行形

では、最後に、これまで見てきた2つの応用例（現在完了形と現在進行形）を合わせた現在完了進行形について考えてみたい。

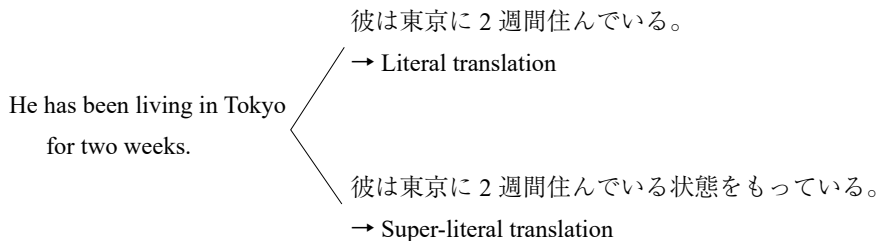
「have been + 現在分詞」の形で示される現在完了進行形は「過去に始まり現在も続いている行為（an action which began in the past and is still continuing）」(Thomson & Martinet, 1996, p.173)を表すが、日本語訳だけでは現在完了形の文と区別が付きにくいことがある。たとえば、He has lived in Tokyo for a long period. (彼は長い間東京に住んでいる) と He has been living in Tokyo for two weeks. (彼は2週間東京に住んでいる) では、日本語訳のみでは両者の文法的差異を認識できない。その差異とは、現在完了形の文は東京に住んでいる状態が「長く続く、もしくは永続的な状態 (longer-lasting or permanent situations)」であるのに対し、現在完了進行形の文には、それが「比較的短い、一時的な行為、及び状態 (shorter, temporary actions and situations)」だという含意があることだ (Swan, 2005, p.447)。

そこで、この両者の文法的意味の相違を理解するために「have been + 現在分詞」の超直訳を考えてみる。「have been + 現在分詞」の have と been (<be) はそれぞれ have possession of the fact that と the state of の意味に解釈することができた。この2つを合わせると、

He has been living in Tokyo for two weeks.

→ He has possession of the state of living in Tokyo for two weeks.

のようにパラフレーズでき、そこから、現在完了進行形の超直訳は次のように表すことができる。



この超直訳によって、現在完了進行形には現在完了形が内包する継続性と現在進行形が内包する一時性の両方が表現されることになり、「現在、東京に2週間住んだ状態にある」という *has been living* の文法的意味を学習者に理解させることができよう。

#### おわりに

以上、超直訳というアイデアを紹介し、現在完了形、現在進行形、現在完了進行形を例に、直訳では表現できないコアとなる文法的意味を超直訳で学習者に理解させる方法を考えてみた。すでに述べたように、訳文が日本語として多少は不自然であっても、コアとなる文法項目が表現される箇所の一語一語の意味を考えていくことで、「have + 過去分詞」「be + 現在分詞」「have been + 過去分詞」といった形が内包する文法的な「影の意味 (shadow meaning)」が見え、直訳ではわかりえない文法事項の「深層にある意味 (in-depth meaning)」を学習者に認識させることが可能になる。そのことで、学習者に「過去と現在完了」「現在と現在進行」「現在完了と現在完了進行」などの微妙なニュアンスの違いを理解させるだけでなく、英語で表現できるという自信を与えることにもなろう。

もちろん、英語のすべての文法事項において超直訳が可能というわけではない。今回は、英語動詞のアスペクトに関連する文法項目を例に挙げたが、この他にも法の助動詞、準動詞などの動詞に関連した文法項目をはじめ、形容詞（比較）や前置詞にも応用できると考えている（江藤，2015）。これらの点の詳述は今後の課題とするが、要するに、超直訳とは文法化によって機能語として使われるようになった語の元来の意味をあえて訳出していくことで、その語が示す文法的な働きを機能語の根源的な意味から原理的に理解し、応用していく力を学習者につけさせる方法である。その意味で、この手法は、歴史的視点に立った、一種の語源的翻訳と言うこともできよう。

非英語母語話者である私たちが英語の運用能力を学習によって習得するには英文法の知識が不可欠である。それは、必ずしも「現在完了の用法の分類」について知ることではなく、現在完了の意味を理解し、それをインプット、アウトプットの両面で使いこなすことのできる実践的能力の基礎となる知識である。そのためには、「現在完了とは何か」といった文法事項（現象）の意味を根本的に理解させることが必要であろう。

語学には基本例文や語形変化の暗記は欠かせないが、中級から上級の学習者——特に知的に成



長した学習者——には、構文や文法事項をただ暗記させるだけでなく、その構文や文法事項が示す意味を説明し理解させることは学習効果を高める方法であると考ええる。そのことで、英語（英文法）に対する学習者の関心が増し、学習意欲が高まってくることもあろう。以上、ここまで述べてきたような利点から、超直訳の英語教育における可能性は少なくないと言えよう。

## 引用文献

- 安西徹雄. (1982). 『翻訳英文法—訳し方のルール』. 日本翻訳家養成センター.
- 江藤裕之. (2006). 「『実用的』文法教育とは一詰め込みの文法教育から、理解する文法教育へ」. 『言語』, 35 (4), 38-43.
- 江藤裕之. (2015). 『英文法のエッセンス』. 大修館.
- Gile, D. (2009). *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. Amsterdam: John Benjamins.
- 澤井繁男. (2001). 『誰がこの国の英語をダメにしたか』. 日本放送出版協会（生活人新書）.
- 杉山幸子. (2013). 「文法訳読は本当に『使えない』のか?」. 日本英語英文学 23, 105-128.
- 三ッ木道夫. (2008). 『翻訳としての思想—ゲートからベンヤミン、プロッホまで』. 白水社.
- Munday, J. (2001). *Introducing translation studies: Theories and applications*. London and New York: Routledge.
- Pinker, S. (1994). *The language instinct*. New York, NY: William Morrow.
- Russian made easy. (2014, June 10). 7 secrets to learn Russian with SLT [Video file]. Retrieved from <http://russianmadeeasy.com/start-thinking-in-russian-with-slt/>
- 白取春彦 (訳). (2010). 『超訳 ニーチェの言葉』. ディスカバー・トゥエンティワン.
- Soanes, C., & Stevenson, A. (Ed.) (2006). *Concise Oxford English dictionary* (11th ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Swan, M. (2005). *Practical English usage*. (3rd ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Thomson, A. J., & Martinet, A. V. (1996). *A practical English grammar* (4th ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility*. London and New York: Routledge.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London and New York: Routledge.
- Yule, G. (1998). *Explaining English grammar*. Oxford, UK: Oxford University Press.

本稿は、2017年8月9日にマレーシア・ベタリンジャヤにて開催されたマラヤ大学言語及び言語学学部主催の The 16th International Conference on Translation 2017 における研究発表 “Rethinking Grammar-Translation Method: Potentiality of the Super-literal Translation for English Language Teaching” (*Proceedings of the 16th International Conference on Translation [ICT-16]*, University of Malaya. Malaysian Translation Association. pp.684-696 に収録) の発表原稿の日本語訳に加筆と修正を加えたものである。なお、本研究は JSPS 科研費 JP16K132524 の助成を受けたものである。